

しあわせと科学 —高楠順次郎の教え—

研究員 松岡佑和



近年のコンピュータの目覚ましい発達は私たちの日常世界を大きく変えています。これは研究の世界でも同様で、コンピュータは様々な研究分野に大きな恩恵をもたらしています。コンピュータにより、研究の科学性がより推進されています。

研究の科学性は自然科学だけではなく、社会を扱う研究分野である社会科学でも重要視されるようになりました。私の専門である経済学ではデータ分析が重要視されます。データ分析で得られた結論は、客観性を保つことができます。経済学では政策を論じることが多く、研究者自身の主観性をなるべく省くため、客観的分析であるデータ分析が重要視される傾向にあるのかも知れません。客観的分析は科学的分析と同義とも言えるので、経済学においても科学性の重要性は強調されることとなります。

ただし、研究に科学性が増すということは、科学的に明らかにされない問題は研究対象とならないという危険性もあります。私自身の経験として、社会的に重要と考えられる問題の研究を行おうとした際に、データが存在しないため断念したことがあります

ます。データ分析が出来ない研究は、科学性が重要視される経済学では“研究”として取り扱われることが難しい時があり、学問分野の縛りとして研究を断念したのです。

しあわせ研究所を設立した武蔵野大学の学祖である高楠順次郎博士は科学や学術研究の重要性を認識しつつも、その限界についても厳しく指摘しています。約100年前の1924年の著書において、科学や学術研究は分析的、断片的、部分的な真理を解き明かすが、人間そのものに意義を与えるようなものではないと言っておられます。

しあわせとは、私たちの心の内を現すものですから、時に科学的な検証が難しい時があります。しかし、科学的な検証が難しいために、その意義がなくなるということはありません。社会科学で扱うデータというのは社会の表面的な部分と言えます。しかし真に重要なのはその裏側、私たちの考え方にあるのかも知れません。高楠博士は上記の言葉に続いて、仏教の重要性を取り上げられています。仏教では生・病・死など私たちが直面する人生の本質的な問題を真正面から取り扱い、人生の指針を与えます。科学的な研究の重要性を認識しつつも、仏教の考え方を他学問に応用することにより、科学で解き明かせない部分にも光を当てることが可能となり、しあわせ研究をより促進出来るのではないかと考えています。